

三保の松

常磐津

全詞章

常磐津

河竹黙阿弥 述

本名題『三保松富士晨明』

作曲者・初演年不詳

ほのぼのと、明行く空の雲晴て、千本の松に風もなく、波も静けき君が代の、恵を仰ぐ朝日影
東を照す宮の名も、高き山路の久能山遠く望めば玉櫛笥、箱根が嶽の二子山、近き眺めは
青嵐、吹上の浜薩埵越

岸打つ波の清見潟、清水の湊朝込みに、船の往来の真帆片帆風のまにまに風早の、御穂の社の
三保神樂

音に聞えし羽衣の、松は常磐に色変ず幾年古りし物語

有渡の浜辺へ雲井より、天津乙女が天降り、松に掛たる羽衣を、漁り人に拾はれて、
帰るよすがも荒磯の、荒れ古屋に果敢なくも、結びし夢の別路に、吾妻遊びと夕汐に

差手引手の駿河舞

霓裳羽衣の一曲に、袖を返して帰る波

其乙女には劣るとも、伊達を駿河の弥勒町

通ひ廊の遊女に、旅寐の憂を忘れ草、朱の煙管の長かれと、かはす袖師のうらなくも

語らふ間さへ短夜に、別れともなく興津川

又の御見と約束の、日取り数ふる後朝に

鐘に恨みぞ有明の、月に残れる吐月峰

あとへ心は残れども、狐が崎の名もあれば、是も手管と菴崎や

手越の里の少将が、昔を忍ぶ厚原の、曽我の祭の賑しく、賤機山の賤女が、浮島が原浮立ちて

田子のええ田子の浦辺へ打来る波へ、姿うつして見る水鏡、雪の化粧の其美しさ、誰に靡くか

夕煙、しよんがいなわけもなや

実に時しらぬ山といふ、不二は四時に変りなく、三保の松原千代かけて、枝葉栄ふる

常磐津の、賑はふ家ぞ目出度けれ